

W.G. アストン『日本文語文典』初版 訳注稿 (2)

遠藤 佳那子

1、凡例 (補足)

- ・本稿より、原著のページ数を [] によって示す。原著において文の途中でページが改まる場合は、その文の終わりまでを前ページの範囲として示し、次の文の冒頭部分に次のページ番号を示す。
- ・原文において、日本語の語や句に対する英訳は ‘ ’ で示されている。原則として ‘ ’ 内の英語は和訳しないが、国学の用語や句の場合は稿者の判断により次の例のように ‘ ’ 内に () に入れて訳出する。
例) 原文 : Nanjaku ‘as if nothing were the matter.’

→訳 : ‘as if nothing were the matter (何も問題が無いかのよ
うに)’ という意味の「なにげなく」

2、本文訳注稿

[17]

第2章 (Chapter II.)

語の分類

(CLASSIFICATION OF WORDS.)

国学者たちは、語を三種類に分ける。即ち、「名^な」、「詞^{ことば}」、そして「てにをは」である。「名^な」は ‘name’ を意味する。この種類には、ヨーロッパ諸語の文法における名詞 (noun)、代名詞 (pronoun)、数詞 (numeral adjective) が含まれる。「詞^{ことば}」は ‘word’ を意味する。この術語のもとには、動詞 (verb) と形容詞 (adjective) が含まれる。「てにをは」とは、最もよく使われる助辞 (particles) の四つ、即ち「て」「に」「を」「は」(または「わ」) が一語に結合したものにすぎない。この名称に含まれるものは、冠詞 (article)、前置詞 (preposition)、それ

から動詞・形容詞の語尾 (terminations)¹である。

この分類は、日本語の構造によく合致している。語を主要な (principal) 品詞 (parts of speech) と従属的な (subordinate) 品詞に分け、さらに主要な品詞は活用しないもの (「名」) と、活用するもの (「詞」) とに下位分類するという分け方に基づいている。しかしここで、この下位分類の仕方を従属的な品詞、つまり助辞と語尾、あるいは「てにをは」にも拡張してはならないという適当な理由は何も無い。そうした場合、次のように語を四種類に分けることになる。

- 1、活用しない主要な語 (「名」)
 - 2、活用する主要な語 (「詞」)
 - 3、活用しない従属的な語
 - 4、活用する従属的な語
- } (「てにをは」)

この修正により、本書では国学者の分類を採用してきた²。

『詞捷徑』において、「名」は「体言」即ち ‘words which remain at rest (静止した言葉)’ と呼ばれ、「用言」即ち ‘words of action (活動の言葉)’ という術語に対置されている。『詞捷徑』における「用言」は旧来の学者が用いる「詞」に相当する。‘rest’ と ‘action’ は、この場合 ‘want of inflection (活用の欠如)’ と ‘inflection (活用)’ とを意

¹ 助詞、助動詞、接尾辞などがここに含まれる。

² 国学者の分類にアストンが修正を加えて採用しているということ。

類似の分類は富樫広蔭『辞玉櫛』(文政十二年<1829>刊)の「動辞」^{うごきてにをは}「静辞」^{すわりてにをは}で、その解説が『詞玉橋』(弘化四年<1847>成立、明治二十四年<1891>刊)に記される。しかし富樫広蔭の著作はアストンの参考文献リストに無い。一方、アストンが頻繁に参照する鈴木重胤『詞捷徑』にも、テニヲハ類を種々に下位分類した中に活用の有無による「運用活字」「無活用辞」の項目があるが、分類の階層がアストンとは異なる。また、富樫広蔭も「言」^{こと}「詞」^{ことば}「辞」^{てにをは}に三分類したうえで「辞」を「動辞」「静辞」に下位分類しており、両者とも四種を同列に分類するアストンとは厳密には異なるといえよう。

味する。また「はたらき」‘working’または‘action’は、活動を表現するような動詞の普通の意味に言及するものではない。

[18]

第3章 (Chapter III.)

活用しない主要な語

(UNINFLECTED PRINCIPAL WORDS.)

この種類には、ヨーロッパ諸語の文法における名詞、代名詞、そして数詞が含まれる。英語であれば他の品詞に翻訳した方が都合の良い語が、日本語の名詞の中には数多くある。この種類の例は、とりわけ漢語由来の語に無数にあるが、その全てが活用せず、それゆえにこの種類に属すると見做されなければならない。英語であれば、どんな品詞に翻訳しても都合が良いだろう。例えば「今」‘now’はその派生 (derivation) が示すように、事実、名詞である。これは「居る」‘to be present’の語根 (root) 「イ」³と「間」‘a space’が複合しており、字義通りの意味は‘the present space’である。「ここ」‘here’もまた「の」「に」など格標示 (case-signs) の付加を許すことから示されるように、名詞である。「進上」‘to offer respectfully’、「御覧」‘look’のような漢語はしばしば単独で用いられはするが、「なさる」「する」‘to do’などの動詞を必要とする。それは文法的に文を完全なものとするためだと理解される。そしてそれゆえに、これらは事実、名詞なのである。

この種類の語は、正確に言えば曲用 (declension) を持たない。数 (number) や格 (case) の区別について何かしら表現するときは、ある種の助辞を語の後ろに置くことによって示される。語それ自体は何の変化もこうむることはない。

³ 歴史的仮名遣いでは、「居る」は「ゐ」、「今」は「い」であるが、第1章の音節表においてア行のイとワ行のヰはどちらも「i」としている。

名詞 (THE NOUN.)

名詞は、単純語 (Simple)、派生語 (Derived)、複合語 (Compound) に分けられる。

単純語、あるいは非派生名詞 (Underived nouns) について解説は必要ない。

派生名詞 (Derivative nouns) はそれほど多くはない。最も一般的に目にするのは抽象名詞 (Abstract nouns) で、「さ」「け」もしくは「み」を形容詞の語根 (root) に加えることによって作られる。

「さ」を伴う抽象名詞は、書物にも話し言葉にも、両方に見られる。例：「^{たか}高き」 'high' の語根「たか」から出来た「^{たか}高さ」、「^{おも}重き」 'weight' の語根「おも」から出来た「^{おも}重さ」。

「け」や「み」を伴う抽象名詞は、話し言葉には稀である。「け」は、「^き気」 'spirit' を意味する「き」と等しい。例： 'as if nothing were the matter (何も問題が無いかのように)' という意味の「なにげなく」、 'an appearance of danger (危険な様子)' という意味の「あぶなげ」。

「み」を形容詞語根に加えることで作られる名詞のほとんどは、抽象的な意味か具体的な意味のいずれかを持つ。従って、「^{たか}高み」は、 'height' か 'a high place' を意味し、「^{ふか}深み」は、 'depth' か 'a deep place' を意味する。英語の 'height'、 'depth' も、同様の両義性を示す。

[19]

いくつかの抽象名詞は、形容詞語根に語尾「ら」をつけて作られる。例：「^{わびし}わびしき」 'miserable' の語根「わびし」から出来た「^{わびし}ら」 'misery'。

複合名詞 (COMPOUND NOUNS.)

複合名詞は、以下のとおりである。

第1 二つの名詞から構成されるもの。「風^{かぜ}」‘wind’ と「車^{くるま}」‘mill’ からなる「風車^{かざぐるま}」‘windmill」、^{かわ}「川」‘river’ と「端^{はた}」‘side’ からなる「川端^{かわぼた}」‘riverside’。

第2 形容詞語根に名詞が連なって構成されるもの。「黒^{くろ}き」‘black’ の語根「くろ」と、「人^{ひと}」‘a man’ からなる「くろんぼ」‘negro」、^{あか}「赤き」‘red’ の語根「あか」と「金^{かね}」‘metal’ からなる「あかがね」‘copper’。

第3 名詞に形容詞語根が連なって構成されるもの。「艦^{とも}」‘the stern’ と「太^{ふと}き」‘thick’ の語幹「ふと」からなる「艦太^{ともふと}」‘big stern’ (船の一種)。

第4 動詞の語根と名詞から構成されるもの。「乗^のる」‘to ride’ の語根^の「乗^のり」と「物^{もの}」‘a thing’ からなる「乗^のり物^{もの}」‘a travelling chair’。そして、

第5 名詞と動詞の語根から構成されるもの。「物^{もの}」‘a thing’ と「知^しる」‘to know’ の語根「知^しり」からなる「物^{もの}知^しり」‘a scholar’ や、「水^{みづ}」‘water’ と「入^いれる」‘to put in’ の語根「入^いれ」からなる「水^{みづ}入^いれ」‘a water holder’。

混種複合語 (HYBRID COMPOUNDS.)

混種複合語 (一方が漢語由来、もう一方が和語由来の要素からなる複合語) は、ヨーロッパ諸語の場合に比べて、日本語では一般的である。

例：漢語で ‘to pile up (積み重なること)’ を意味する「重^{じゅう}」と、和

⁴ 連用形にあたる。アストンは本書において、いわゆる連用形を「Root or Adverb.」と称する。

語で ‘box’ を意味する「箱」^{はこ} からなる「重箱」^{じゅうばこ} ‘a nest of boxes made to pile up one on the top pf another (箱の上に他の箱が積み重なるように作られた入れ子式の箱)’。

また、「覚帳」^{おぼえ ちょう} ‘a note book’、^{はれつ だま}「破裂玉」 ‘a shell’、^{じょう ぶくろ}「状袋」 ‘an envelope’ などの例がある。

敬称の接頭辞 (HONORIFIC PREFIXES.)

複合語の中のいくつかは、尊敬を表す助辞「お」、「おん」、「み」のうちの一つを名詞の前に付けた⁵ものと考えべきである。

「お」は、尊敬を表す接頭辞 (prefix) としては、書き言葉に属すると言える例はほとんど無い。これは一般的に和語由来の語に伴って用いられるが、この規則に反して、無数の例外が存在する。「お留守」 ‘absent’、^{やくしやう}「お役所」 ‘the honorable public office’、^{たく}「お宅」 ‘the honorable house’ 即ち ‘your house’ などである。

[20]

「おん」は書簡の文体において「お」の代わりに用いられる。

「み」は「神」^{かみ} (日本神話の神々) や、帝に関連する語の前に付けられる。例:「御子」^{み こ} ‘a prince’、^{み す}「御簾」 ‘the semi-transparent screen hung before the Mikado on public occasions (公式の行事で帝の前に吊す半ば透けている仕切り)’、^{み こと}「尊」 ‘a deity’。「み」は和語の前にしか付かない。「お」、「おん」、「み」は、同じ語根「おみ」のそれぞれ異なる形であり、これは形容詞「大」^{おお}「大」 ‘great’ の語根「おお」とも同一である。「お」は、「おん」の「ン」が母音化して「ウ」になり、そしてその「オウ」が短縮して「オー」になることによって得られる。

漢語の前では、尊敬を表す接頭辞「ご」または(ぎよ)「き」、「そん」などが用いられる。

⁵ 原文「prefixed」。

性 (GENDER.)

複合語の中にはまた、‘male’ を意味する接頭辞「お」または「おん」、‘female’ の意味の接頭辞「め」時に「めん」を伴った名詞だと考えるべきものがある。

例

「おむま」 house 「めむま」 mare
「おしか」 stag 「めしか」 hind
「おんどり」 cock 「めんどり」 hen

複合語の項目の下には、注目すべきことに一種の複数形が残っている。それは数種の名詞に限り、語の繰り返しによって作られるものである。これらの形は、ヨーロッパ諸語の複数形と全く同じ影響力を持つわけではなく、またその意味も、どんな場合でも全く同じというわけではない。以下の名詞の前にある ‘Every’ ‘all kinds of’ は、最も一般的な翻訳である。

例

「くに」 ‘a country’ 「くにぐに」 ‘every country’
「ひと」 ‘a man’ 「ひとびと」 ‘all sorts of men’
「ところ」 ‘a place’ 「ところどころ」 ‘various places’
「とき」 ‘a time’ 「ときどき」 ‘sometimes’
「たび」 ‘a time’ 「たびたび」 ‘time after time’ ‘often’
「しな」 ‘an article’ 「しなじな」 ‘all kinds of articles’ ‘an assortment’

ほとんど全ての場合、複合語の第二の部分のはじめの文字は、それをゆるす文字ならば、「にごり」を帯びる。

代名詞 (PRONOUNS.)

アーリア諸語では顕著な位置づけを担う人称の区別だが、日本語にお

いては知られていない事である。動詞は人称を標示するための文法的な活用をしない。そして意味において他の諸言語の代名詞と対応する語があるにも関わらず、それらの語法 (grammar) は名詞の語法と等しいため、これらを別々の種類に分けるという考え自体、国学者たちの心に浮かぶことすらなく今に至る。

[21]

日本人の思考においては、ひとつの人称、即ち三人称だけがある。

日本語における人称代名詞の使い方は英語に比べてはるかに制限されている。ラテン語やギリシア語のように、これらは単なる動詞の人称の記号としてではなく、曖昧さを防ぐために、あるいはそれらを強調するような場合に用いられる。従って、‘I will go’ ‘He does not know’ は、日本語では単純に「行かん」「知らず」となる。だが代名詞が強調される場合、日本語では次の文のように表現されなければならない。

<p style="margin: 0;"> ^こおんな 子女ならば、 ^わ我が^こ子にせん、 ^{おのこ}男ならば、^{なんじ}汝 ^{ゆみやと}弓矢取りになしたてよ。 </p>	<p style="margin: 0;"> If the child is a girl, I will make it my child, if it is a boy, do you educate him for a soldier. </p>
---	---

人称代名詞が無い場合、通常、動詞の人称は、二人称を意味する尊敬の形式、もしくは一人称であることを示すへりくだる形式の存在から帰納される。

複数形を示す種々の様式は、名詞の場合はほとんど頼りにならない。しかし代名詞であれば、重複の形式を採用するか、あるいは、二つ以上の人や物を意味する時の複数形の接辞 (affixes) を付加するのが規則である。

人称代名詞 (PERSONAL PRONOUNS.)

一般的な人称代名詞の一覧

一人称代名詞 (Pronouns of the 1st. person.)

「われ」(複数形「われら」、「われわれ」、「われども」)は、書き言葉では一人称代名詞として最も一般的な語である。漢字の〈吾〉を翻訳するのに最も一般的に用いられるのはこの語である。話し言葉の「われ」は、上位者が下位者に話しかける時に用いられる。「おれ」、即ち「われ」の転訛した形式は、最下層の人々の会話で一般的に用いられる。

「わが」は所有格 (possessive) の助辞「が」を、「われ」に見られるものと同じ語根「わ」に付加して作られたが、これは一般的には、特に一人称に関わりは無く、‘one’s own (自分自身)’を意味する。従って、「我が子」は、‘my own child’だけでなく、‘his own child’、もしくは一般的に、‘one’s own child’を意味する。

[22]

古語では時々「わが」の代わりに「あが」という。

「わたくし」(複数形「わたくしら」、「わたくしども」)は、話し言葉では一人称代名詞として最も一般的な語である。これは等位の者、あるいは上位者と話しかける時に用いられる。「わたくし」は漢字〈私〉に相当し、それと同じように ‘selfishness’ という意味も持つ。従って、「私の心」は ‘my heart’ も、‘the heart of self’ も表す。即ち自分自身である。「わたくし」は古代⁶の文献には見られない。「わたくし」の俗語の形式は「わし」、「わたし」、「わち」などである。

「やつがれ」は「やつこ」 ‘a slave’、‘a servant’ に関連しており、書き言葉に特有である。これは強くへりくだる表現の形式である。

「それがし」の意味としては ‘a certain person’、‘somebody’ が適

⁶ 原文「more ancient」。本書で記述しているのは主に中古語であるため、それよりさらに古い時代の、上代を想定していると考えられる。

切だが、書き言葉ではしばしば「わたくし」と同等に用いる。

上述は和語であるが、以下に述べる漢語由来の語も一人称代名詞として用いられる。

「チン」〈朕〉は 'I' の意味で、帝が公的な場面において用いる。

「シン」〈臣〉は「チン」の対極にある。これは政府に請願する際や、高位の人物と話をする際に用いられる語である。漢字〈愚〉「グ」'stupid' を前に付けるのが普通である。

「ヨ」〈予〉は書き言葉に特有である。これはほとんど、下位の者たちに対して話をする場合に用いられるが、等位の者どうしでも使うことができる。

「セツシャ」〈拙者〉'the awkward person' は、時に公式の書簡の文体で用いられる語であり、通常は下位の者たちに話をする時に使う。話し手が威厳のある調子を加えたいと思う場合を除き、会話ではあまり聞かれない。話し言葉では、優位性が無いことを含意する。「セツシャ」は一般的に会津の国の方言で「わたくし」の代わりに用いられる。

「ボク」〈僕〉'servant' は、和語「やつがれ」に相当する。これは非常にへりくだる言葉である。

二人称代名詞 (Pronouns of the 2nd. person.)

「なんじ」(複数形「なんじら」) は、漢字〈汝〉に相当する。これは下位の者たちに話しかける際に用いる。「なんじ」は書き言葉に限定される。

「そのもと」(時に「そこもと」、「そのほう」) は、書簡の文体に多く用いられる。これは上位者に話しかける際には使用しない。

「きみ」'lord' は漢字〈君〉に相当する。これは非常に敬意の込められた語で、下位の身分に属する人々に対して使われることは、まずない。

[23]

「きみ」は日本の恋の詩歌では、‘you’を指す、最も一般的な語である。またこの語は話し言葉でも用いるが、それは知識層の人々が互いに呼びかける場合に限られる。

「ぬし」‘master’は「きみ」と等しいものとして、昨今の大衆的な詩に時々あらわれる。話し言葉においては蔑む表現の形式である。

「おまえ」、「おまえさん」、「おんまえさま」。これらは文章語 (literary language) には属さない。「おんまえさま」は、下層の人々が書く手紙において ‘you’ を示す表現である。

「いまし」は「なんじ」と同じ重みを持つ。この語はほとんど使われない。

「きさま」は敬意を表す漢語の接頭辞「キ」〈貴〉‘noble’と、和語「様」^{さま}‘sir’から構成された混種語である。「きさま」は頻繁に書簡の文体に現れ、上位者に話しかける際には用いられないとはいえ、決して無礼な語ではない。ただし話し言葉においては、これは極端な侮蔑を含意する。

「あなた」は、‘you’の意味で用いる場合⁷、書き言葉には属さない。

「キクン」〈貴君〉‘noble lord’は漢語である。これは上位者、あるいは同等の者へ話しかける際に用いられ、話し言葉の「あなた」に相当する。これは書簡の文体では一般的である。

「キコウ」〈貴公〉は「きさま」同様、書き言葉では敬意の込められた語だが、話し言葉では下層の者に話しかける時にしか用いられない。これは漢語である。

三人称代名詞 (Pronouns of the 3rd. person.)

「あれ」(複数形「あれら」)は、‘he, she or it’、‘they’である。

⁷ 「あなた」には、ここで話題とする対称の用法以外に遠称の用法があることを踏まえて、このように記述している。

「あれ わ」の古形であり詩的な形式は「あわ」である⁸。「あの」は、「あれの」とは区別されなければならない。「あの」は形容詞⁹であり、「あれ の」は「あれ」の所有格である。従って、「あのひと」は 'that man' 'he' を意味する一方、「あれ の ひと」は 'his or her man' を意味する。

「かれ」、複数形「かれら」もまた、'he, she or it, they' である。「かれ」と「あれ」との相違は、ちょうどラテン語の 'is' と 'ille'¹⁰ とが異なるのと同様である。「かの」と「かれの」間の相違も、「あの」と「あれの」の間にある相違と同様である。「かの」は一般的に 'a certain' と訳することができる。例えば「かの ところに」は 'in a certain place' である。ちょうど「あわ」が「あれ わ」に対して古形で、詩的であるように、「こわ」は「かれ わ」に対して古形、詩的である。

「あの ひと」、「あの おかた」。「あれ」「かれ」の代わりに、話し言葉ではしばしば、より敬意の込められた表現の「あの ひと」「あの おかた」で置き換える。「かれ」「かの」は話し言葉では用いない。

[24]

指示代名詞 (DEMONSTRATIVE PRONOUNS.)

「これ」、「この」は 'this' 'that which is here' である。「これ」(複数形「これら」)は実名詞 (substantive) の形式である。この語は全ての性に用いられる。形容詞形は「この」であり、「これ の」とは区別され、「あれ」が「あれ の」と区別されるのと同様である。一方は形容詞

⁸ この「わ」は係助詞「は」。原文では「wa」と表記されるので「わ」と翻字する。以下同様である。

⁹ 現代の学校文法では連体詞にあたる。西洋文典では名詞を修飾する語を形容詞とするため、連体修飾語として用いられる連体詞も、西洋文典の枠組みでは形容詞に属することになる。

¹⁰ ラテン語 is は近称、ille は遠称を表す。

だが、もう一方は名詞の所有格にあたる。「こわ」は「これわ」の代わりに時折用いられる古形であり、詩的な形式である。

「それ」、「その」は、‘that’、‘that which is there’ である。「それ」（複数形「それら」）は、実名詞形である。「それ」は全ての性に用いられるが、「これ」がほとんど中性であるのと同じように、人称代名詞によって示される全ての人称に用いられる。「その」は形容詞形である。語根「そ」は「それわ」の古い形式として「そわ」に現れる。「それ」は正確に言うとは二人称代名詞で、主に聞き手の近くにあるもの、もしくは聞き手に何かしら関連するものについて言及する。一方、「これ」は一人称的な語で、話し手の近くにあるもの、話し手に関連するものと結びつく。それ故、「そなた」（「そのかた」‘that side’）、「そこ」（「そのところ」）の用法は、二人称代名詞になる。「その」は通常、英語の所有格代名詞 ‘your’ に相当する。「それ」「その」は、ちょうどいま述べられたものに言及する。それは聞き手の思考の中に存在するものとして話し手に理解されている。

漢文における漢字〈夫〉で、章の冒頭の独立した位置づけにあるものは、さほど珍しくない。これに対応する和語「それ」は、そのように用いられるべきではない。

「これ」と「それ」の例

これ良きことなり。

龍の首に五色に光る玉あり、
それをとりて給え。

こわ異物の皮なり。

This is a good thing.

In the dragon's head there is a jewel which shines with five colours ; it take and give to me.

This is the skin of a different animal.

指示代名詞 (DEMONSTRATIVE PRONOUNS.)

「たれ」‘who’ は、人に対してのみ用いられる。「だれ」はこの語の

近代的で口語的な形式である。語根の形式である「た」は「たぞ」「たが」といった古語の表現に保存されている。

「なに」‘what’は物に対してのみ用いられる。同一の語根が「なぜ」「など」などの語に現れる。

[25]

「いづれ」‘who or which among a number’（フランス語 ‘lequel’）は、人にも物にも用いられる。この語の近代口語的な形式は「どれ」、そして、この語根から派生した他の近代的形式においても類似の変化が生じる。例えば「いづち」は「どち」、「いづこ」は「どこ」などになる。

古典日本語は ‘at any rate’ という意味を持ち合わせていないが、話し言葉や後世の書き手たちは、しばしばその意味で「いづれ」を用いる。

疑問代名詞の例

この川の ^{かわ} 名 ^{なに} 何 ^{もう} と申す？	What is the name of this river?
この女 ^{おみな} た ^と ぞと問う。	He inquired who this woman was.
いづれにもあれ。	Be it whichever it may.

次に掲げる、これまで述べてきた代名詞の表は有益なものと思われる。

	語根	名詞 ¹¹	形容詞 ¹²	方向を表す副詞	所在を表す副詞
He (ille)	あ	あれ	あの	あち (ら)	あすこ (ら)
He (is)	か	かれ	かの	—	かしこ (ら)
This	こ	これ	この	こち (ら)	ここ (ら)
That	そ	それ	その	そち (ら)	そこ (ら)
Who	た	たれ	—	—	—
"	だ	だれ	—	—	—
Which	—	いづれ	—	いづち (ら)	いづこ (ら)
"	—	どれ	—	どち (ら)	どこ (ら)

¹¹ 「Noun」とあるので「名詞」と訳すが、文中では「substantive」とあり、「実名詞」と訳出した形式にあたる。

¹² 脚注9参照。

複数形の接尾辞「ら」は、限定されないことを強めたいときに付加される。従って「どこら」は 'whereabouts' と訳されうる。

不定代名詞 (INDEFINITE PRONOUNS.)

疑問代名詞は、助辞「か」または「も」の付加によって不定代名詞になる。従って「たれか」は 'some one' を意味し、「たれも」 'any one'、「なにか」 'something'、「なにも」 'anything' など同様である。その他の不定代名詞として用いる語は――

「ひと」、文字通り 'man' を意味し、フランス語の 'on' や英語の 'some one'、'people' に相当する。またこれは、'other people' も意味する。例：「^{ひと}人の^{うわさ}噂も^{しちじゅうにち}七十日なり」 'The talk of the world is for seventy days.'。

「それがし」は元来 'a certain person' を意味する。しかし単にへりくだった言い方での 'I' になってしまった（中国語 'meu' 〈某〉のように）。[26]

「なにかし」 'a certain person'、特定の 'somebody' は、人の名前を知らないときか、意図的に明示しないでおくときに用いる。

再帰代名詞 (REFLEXIVE PRONOUNS.)

「おのれ」 'self'。属格 (genitive) の助辞「が」がつく時、「おのがわるきこと」 'one's own faults' の句のように、末尾の音節が脱落する。副詞的な句「おのづから」 'of oneself'、'spontaneously' は、頻繁に用いられる。「づ」はここでは属格の助辞「つ」が「にごり」を帯びたものである。「おのづから」の一般的な同義語は「みづから」である。この語の「み」は 'body' を意味する名詞「^み身」である。

「わたくし」は 'self' の意味で、後世の書き手に用いられる。

「わが」は、正確には一人称代名詞である。しかしこれは頻繁に ‘one’s own’ と等しくなり、全ての人称に用いられる。

「自分^{じぶん}」と「自身^{じしん}」は漢語での ‘self’ である。これらは話し言葉に多く用いられる。

関係代名詞 (RELATIVE PRONOUNS.)

日本語は関係代名詞を持たず、実際のところ関係節もまったく無い。英語であれば関係節になるような部分は、日本語では連体修飾節 (attributives clause) になり、他の全ての連体詞 (attributives) と同じように、英語であれば先行詞になる名詞の前に置かれる。動詞はこの場合、連体形 (attributive form) になる。従って ‘the man who comes’ は日本語で「来る人^{くひと}」、‘the man who came yesterday’ は「昨日来し人^{きのうこひと}」となる。

関係節を表現するときに「ところの」が現れる構文は、漢語の慣用句をただ逐語的に翻訳したもの¹³である。和文や話し言葉で使用されてはならない。従って ‘the man who comes’ は「来るところの人^{くひと}」ではない。これは優雅ではなく、無益に回りくどい。簡潔に「来る人^{くひと}」でよい。

数詞 (NUMERALS.)

日本語はふたつの数詞の系列を持つ。ひとつは和語から成り、もう一方は漢語から構成される。

[27]

¹³ 漢文訓読文のことを指す。

	Japanese		Chinese
1	ひとつ	一	いち
2	ふたつ	二	に
3	みつ	三	さん
4	よつ	四	し
5	いつつ	五	ご
6	むつ	六	ろく
7	ななつ	七	しち
8	やつ	八	はち
9	ここのつ	九	く
10	とお	十	じゅ
11	とおまり ひとつ	十一	じゅいち
12	とおまり ふたつ	十二	じゅに
20	——	二十	にじゅ
30	みそ	三十	さんじゅ
40	よそ	四十	しじゅ
50	いそ	五十	ごじゅ
60	むそ	六十	ろくじゅ
70	ななそ	七十	しちじゅ
80	やそ	八十	はちじゅ
90	ここのそ	九十	くじゅ
100	もも	百	ひゃく
500	いお	五百	ごひゃく
800	やお	八百	はっぴゃく
1000	ち	千	せん
10,000	よろづ	萬	まん

11 以上の和語系列の数詞は、今は廃れている。

「よろづ」は、まだ 'a large number' の意味で用いられている。

表にある数字よりも大きな数は、「まん」の倍数によって表現される。
例：150,000；「十五万」^{じゅうごまん}。

複数の語からなる数詞は英語と同じ順番で配列される。例：1868
「千八百六十八」^{せんはっぴやくろくじゅうはち}。

10までの和語系列の数詞は、和語の前で用いられる。この位置では大抵、末尾の音節「つ」無しに用いられる。従って、‘two years’を「ふたとせ」とも「ふたつとせ」とも言える。前者の表現はおそらく複合語の性質によるもので、後者の「つ」は、私見によれば属格の助辞「つ」と同一である。話し言葉においては、この「つ」の意味は忘れられ、それ故に「ふたつのとし」のような表現がしばしば聞かれるのである。

[28]

漢語の10までの数詞は、もっぱら漢語の前でだけ用いられる。この位置に現れる漢語は単音節で、通常、重さや大きさの名称、もしくは以下に記述する助数詞 (auxiliary numerals) に属する。

助数詞 (AUXILIARY NUMERALS.)

日本語では、数詞が直接名詞に接続するかわりに、ほとんど常に、私があえて助数詞と呼ぶものを好んで用いる。これらは、英語の ‘six head of cattle’、‘two pair of shoes’、‘five sail of ships’ などのような句に相当する。これらの句はそれぞれ、日本語で「牛六匹」^{うしろつびき}、「履物二足」^{はきものに}、「船五艘」^{ふねごそう}となるだろう。助数詞はたいいてい漢語由来の語であり、その一覧は大方の漢語文典にあげられている。わずかではあるが、和語由来の語もある。例えば「二柱の神」^{ふたはしらかみ} ‘two gods’ のように、日本神話の神々に使う「柱」^{はしら} などである。他に、和語の助数詞の例としては、「とまい」^{くらふた}¹⁴がある。倉庫に対して「蔵二とまい」 ‘two warehouses’

¹⁴ 「戸前」^{とまえ} のこと。土蔵を数える助数詞。

のように用いる。助数詞は、最後に挙げた二例に示すように、名詞に先行することも、後続することもある。

助数詞の例

ここに商人一人あり。 <small>しょうにんいちにん</small>	There is one merchant here.
牛千匹兵庫表 ¹⁵ に <small>うしせんびきひょうこもて</small>	There are one thousand head of cattle at Hiogo.
ござそうろう。(書簡文体) <small>こじき さんにん</small>	Three beggars.

副詞 (ADVERBS.)

「名」もしくは活用しない語の中に、数多くの副詞が含まれる。

例

いと	very	あまり	too
はなはだ	very	ここ	here
いま	now	etc.	etc.

上述した語の文法について解説は必要ない。時に「に」「の」などの格助詞 (case suffixes) が後続することからわかるように、全てではないにしろ、大多数が事実、名詞である。

間投詞 (INTERJECTIONS.)

他の諸言語のように、間投詞は文法を持たない。

¹⁵ この「表」は、ある方向の土地、地方の意味。

【参考文献】

古田東朔 (1974) 「アストンの敬語研究—人称との関連について」『国語学』第108集

古田東朔 (1980) 「コソアド研究の流れ (一)」『人文科学科紀要』第71輯 国文学・漢文学 20

古田東朔 (1987) 「コソアド研究の流れ (二)」『人文科学科紀要』第85輯 国文学・漢文学 23

(以上三編、鈴木泰ほか編 (2010) 『古田東朔近現代日本語生成史コレクション第3巻』くろしお出版に再録)

【補足・訂正】

前号 58 号掲載「W.G.アストン『日本文語文典』初版 訳注稿 (1)」について、補足と訂正を以下のとおり記す。

・「1、はじめに」

「日本語教育史の観点からも等閑視されてきた憾みがある」と記したが、中川かず子 (2003) 「外国人による日本語文法教本の研究：W.G.Aston 著『日本文語文典』を中心に」(『北海学園大学人文論集』23・24) があることを補足しておく。

・「序文 (PREFACE.)」

原文「They are to be found in the Library of the British Museum.」を、「これらは大英博物館の図書館で閲覧することができる。」と訳出したが、これは「私がこれから大英博物館の図書館に (一覧にある文献を) 寄贈する」ことを謙遜した表現とのご教示を、豊島正之先生からいただいた。こちらの解釈をとりたい。

・なお、58 号裏表紙の英題に誤記があった。正しくは「A Japanese Translation with Notes: A Grammar of the Japanese Written Language (1st ed.) by W.G. Aston (1)」である。記してお詫び申し上げます。